

スイスの教育システムと現地校訪問

前チューリッヒ日本人学校 教諭

長崎県対馬市立大船越中学校 教諭 長瀬 史佳

キーワード：スイス，教育制度，職業，現地理解，現地校訪問

1. はじめに

(1) スイスの教育制度について

スイスの教育に関する権限は、一部、連邦や市町村にも分配されているものの、主に州が持っている。スイスの教育制度は州が権限を持ち、連邦レベルに教育を管轄するいわゆる教育省はない。スイスには、多様な文化、言語があり、各州が教育制度の権限を持つことにより、教育の分野においても多文化・多言語の共存が考慮されている。連邦レベルで統一されているのは、就学開始年齢、学年の始業時期、期間、義務教育の年数である。各州には独自の学校教育法があり、市町村にもその地域に適応した教育方針が立てられるよう、大きな自治権が与えられている。地域によって多少の違いがあるが、基本的には9年間の義務教育である。しかし、日本とは、根本的に教育の内容が違う。古い時代のドイツの教育制度にも通ずるものがあるが、将来の仕事、職業との関連が強い。

(2) 教育システムの概要

義務教育は各州および属する地方自治体の共同職務で、自治体は就学年齢の児童が学校で勉強できる環境に配慮している。学校運営に関しては地方自治体の学校委員会の責任において監督・指導が行われる。学校は宗教的に中立であり、家庭の教育権利である信教の自由を損なってはならない。保護者には児童を定期的に学校に通わせる義務があり、義務が果たされない場合は学校委員会による公聴会後、告発される。

9～11年間の義務教育終了後、その後は75%が職業訓練校に行き、25%が大学進学を目的とする高校（ギムナジウム）へ行く。職業訓練校は最大4年で、週5日のうち1日または2日を有給で会社等の訓練を受け、その他の日は学校で基本的な教養を学ぶ。万が一途中で進路変更を希望する（ギムナジウムから職業訓練校に移る）場合は、職業訓練校に入学するところからやり直さなければならない。費用は20歳までは無料である。進路変更をする生徒は全体の5%ほどである。実際に就職し、その後別の職業に進むことを希望する場合は、特別なプログラムが用意されており、それを受講することで自分が就きたい職業への準備を行うことができる。

職業訓練校在籍中のインターンコースは、どの生徒も受け入れてもらえるが、卒業後の就職については、世界的な不況のあおりを受け、スイスでも難しくなっている。しかしこの問題に対しても、国が失業保険を手厚くしたり、さらなる職業訓練コースの整備を公的資金で行ったりすることで、就職できなかった人へのサポートを行っている。

2. 研修内容

(1) Gymnasium（ギムナジウム）現地校視察（中高一貫校）

2つの学校が合併し新しく Kantons Schule Zürich Nord 校として発足。生徒数は、中学1年生から高校3年生までで約2000人（1クラスは24人程度）在籍している。教員数は非常勤の講師も含め、約250人である。授業は、7時45分～17時45分（1時間目～11時間目）まであり、各クラスや専攻によって、受ける授業が決まっている。日本の大学のように自分に必要な授業を受けるので、空



ギムナジウム授業風景

き時間があることもある。廊下や各教室には各授業の時間や教室の一覧表がある。

〈訪問を終えて〉

日本の中等教育にあたる、ギムナジウム校で授業を参観した。授業は高等クラス美術（鑑賞）、数学、小学部6年の音楽を参観させていただいた。スイスの子どもは中学校在籍時にすでに、明確な目的をもって進学先を決めなければならない。6年間のカリキュラムで人数が入学時の40%程度に減ってしまうという現実があり、やはりそこから日本とは違うスイスの厳しい教育制度を感じる。生徒はとても真剣に授業に取り組み、必死に進級を目指して努力するようである。早期から自己の将来について真剣に考える姿こそ、自己責任に基づくスイスの、責任感ある社会人を育成していく要因になっているのかとも考える。

教育のシステムを知るうえでは、ギムナジウムや現地校の研修は日本の教育と比較する上でとても参考になった。帰国後はここで学んだことを教育現場に持ち帰り、大いに役立てたい。

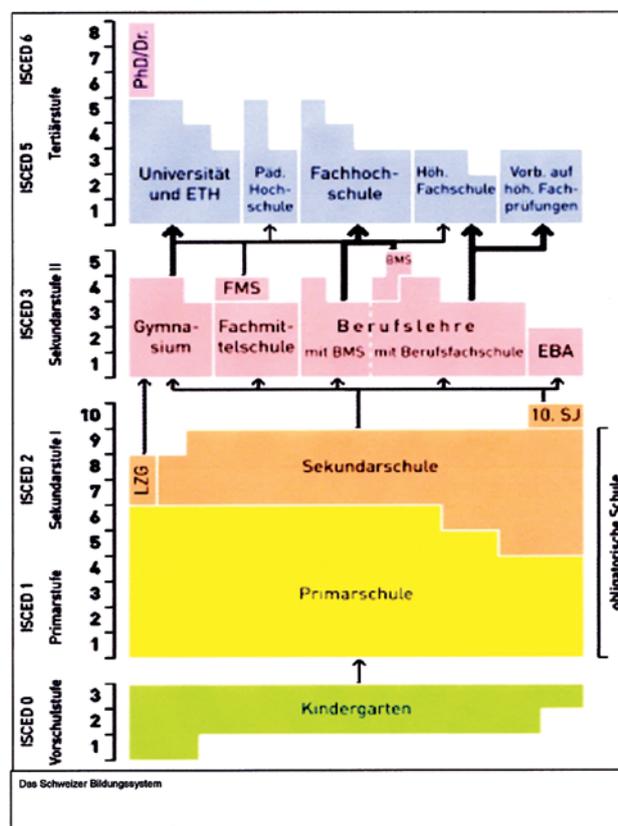
(2) 現地校（中学校）授業参観〈フライエシュトラッセ校〉

〈概要説明〉

フライエシュトラッセ校は日本の中学校にあたり、3年間の教育課程である。州によって、義務教育年数が異なっており、留年制度がある。子供たちは小学校卒業段階でA～Cの成績分けがされ、中学校に進学してくる。A～Cの成績ごとのクラスが分けられ、授業を受けていく。年度ごとに入れ替わりはあるようだ。クラスが変わる場合は保護者を呼んで相談をしていく。それぞれの州には各々、生徒の将来を意識させるプログラムが用意されており、今回、チューリッヒ州で作成されたプログラム（8年間実施で高い評価を受ける）を紹介していただいた。中学2年の段階で、その適正を調べるためのプログラムが実行される。

企業の説明会を（ベルフスメッセなど）受け、自分が興味のある企業や進学先を見つけさせる。次に数学・ドイツ語・フランス語・英語など、進学・就職のために必要な教科のテストを受け、自分が全体のどの位置におり、どのような力が欠けているのか、どのような職種が向いているのかなどを知ることになる。そして、生徒は自分の適性検査のようなプログラムを通して、自分の課題を知り、3年時には課題を克服するための授業選択、プログラムを担当教諭と相談しながら決定し、将来に向け、必要な力を付けていく。そして、再びテストを受け、課題を克服できたかを確認していく。どちらかというとも日本の学力診断テストのようなものだと思う。しかもスイスは将来の職業の決定にまで影響するテストのため、生徒のプレッシャーは相当のものだろう。日本の中学生徒は将来に対する意識がスイスと比べると明らかに低いと感じた。

この中学校の卒業後の進路は、約20%がギムナジウム（進学コース）、70～80%がベルフスシューレ（職業訓練校）、残りが就職・留年組にあたる。理解の遅い子どもたちは特別に2年の専門学校コースがある。その他、能力はあるが自分の進路が定まらない子どもたち（約8%）は、あと1年学校を継続する。小学校でも落第がある



スイスの教育システム（チューリッヒ州）ドイツ語

参考：チューリッヒ州教育庁の学習指導要領より抜粋

スイスの教育システム

こともあり、中学段階で1年遅れるということは、あまり気にしていない様子である。ベルフスシューレ（職業訓練校）を選択する生徒は、週に3日は会社に勤め、残りの2日は専門学校に通うといったシステムになる（職業によって異なる）。そこでは生徒も働きながら、月に700CHF～1000CHF、3・4年生からなら、1500CHF～1700CHFの給料がもらえる。生徒は自分のつきたい職種に就き、働きながら専門の学習に励んでいるのだから、日本の学生のアルバイトとは異なり、働くための学習を会社で体験し、学校で専門知識を高めていることになる。日本も見習うところではある。ただ、このシステムに入ってしまうと、生徒は大学には進学することはできず、職業が若い年代から決定づけられるといったことになり、フレキシブルに変えられるわけではない。なお、落ちこぼれ対策の一環として、中3の学年の最後に年間20時間ほどの時間を使い、各自がプロジェクトを創りそれを発表する機会を設けている。

〈訪問を終えて〉

学校は州のルールに従いつつも、学校独自のシステムや進路指導を行っている。特に中学校卒業後の進路については、より具体的な話を聞くことができた。自分の将来に向けて、常に目的意識を持たせ、今自分がどんな位置にいるか、苦手なところはどこで、どれだけ伸びているかをコンピュータで管理されている。また、それは保護者との面談の時も利用している。日本でも進路指導の時には同様の資料を用いているが、それは担任独自の資料であることが多いので、システムそのものが学校で管理されているということがわかった。スイスの職業選択は日本に比べて非常に早いと言われているが、進度別のカリキュラム、理解の遅い生徒への特別授業、一般の職業学校の他に2年の専門学校、自分の進路を決めかねている生徒のための教育システム等、全ての生徒に対して十分な準備がなされている。

(3) ベルフスメッセ（体験型職業学校説明会）事前説明会への参加

チューリッヒ州の中学部1年生を対象として行われている職業学校の説明会に参加した。

〈説明を受けた職業学校〉

①左官屋

- ・3年コース。色を塗る、セメントを塗るという二つのコースがある。
- ・週1日学校に行き、4日は現場に出て勤務する。
- ・1ヶ月、500CHFの手当がある。
- ・平均では18歳で社会に出ることになるが、その時の初任給はほぼ4,700CHF（日本円で50万円程度）が最低限保障されている。

②コンピュータ

- ・3年コース。週2日学校に行き、3日勤務する。
- ・知識を習得するために中学卒業後2年間、事前の学習会を受けた後、2年目から編入学することも可能。
- ・就職率はほぼ100%。
- ・80～90%の生徒が最後まで学習し、資格を得ることができる。
- ・初任給は4500CHF。

③交通関係の仕事（電車、バス、船など）

- ・3年間修行。中学校時代の成績は不問。
- ・修行前に適性検査があり、あまりにも不向きな場合は進路変更をすることもある。

④コック

- ・3年または2年の修行ののち、試験がある。
- ・中学校ABC（成績のグレードでAが優秀者）のどのグレードからでも受け入れる。
- ・会話のテストはない。修業期間中、言語の勉強も可能。
- ・勤務時間が変則であり、土日、休日も働くという気持ちのない人には不向き。
- ・学んだあと大学進学を希望する場合は、修行開始時にその希望を事前に伝えなければならない。
- ・コックの資格を取った後、ホテル支配人やサービス業の資格、ダイエット料理の資格をとる人も多い。

〈研修を終えて〉

スイスの場合、多くの職業にライセンスがあり、就職した後、ライセンスを取得するまでは、いわゆる修行期間ということで、給料も安く、業績によっては採用を取り消される場合もあるそうである。しかし、学校に通ったり、実地で努力したりしてライセンスを取得することで、給料は上がり正式採用されるということがわかった。また、職業によっては非常に高い倍率（30～40倍）のものもあるということがわかった。

この研修を通して、子どもたちの職業選択に直結する進路学習（キャリア教育）を子どもたちの目線で実施し、体験させる場所をしっかりと提供していること、自治体が手を差し伸べ、援助しているということ、また、親や教員のためのメッセでもあるということを知り、社会全体で子どもの未来を考えていくというスイスの取り組みを知ることができた。

3. まとめ

スイスで若者が生き生きと働く姿を見ていると、プロフェッショナルとしての自覚や誇りを持ち、大学を出て就く職業であろうが、職業訓練を経て就く職業であろうが、どんな職業に就いても偏見なく勤労するという意識が素晴らしいと感じた。

「なんとかなるさ」といういい加減な考えでは、責任のある大人にはなれないというのがスイスの教育制度の中にしっかり組み込まれている。ギムナジウムや現地校の教育システムを知ることで、日本の教育とは違ったスイスの教育のよさを知ることができた。大変有意義な研修であった。